

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-0075
施設名	MIWAシンフォニア保育園
施設所在地	2-3-101アーバンドッグパークシティ豊
法人名	社会福祉法人みわの会

1. 活動のテーマ

<テーマ>

【色・自然・光】「五感で感じ、様々な経験を広げる」

<テーマの設定理由>

月に1回招いている美術講師による活動。このクラスのこども達は、新しく出会う素材の感触や、粘土や絵の具といった汚れが伴う遊びを苦手としているこどもが多かったため、汚れても失敗しても大丈夫という安心感を育てて、自分の感じるままに表現をする経験をしてほしいと思い、このテーマにした。

2. 活動スケジュール

・4月「水とインク」5月「指絵具」6月「トロトロの絵の具」7月「色水と霧吹き」8月「色の調合」9月「土粘土」10月「外の自然物に触れて遊ぶ」11月「秋の自然物で作る」12・1月「光と影」3月「水族館を作ろう」

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

・感触を伴う素材や可塑性のある素材への興味に差があるため、それぞれの興味や許容度に合わせて少人数にして設定する教材を考えた。また、興味が継続するこどもとすぐに離れてしまうこどもがそれぞれ過ごせる環境も設定する。・インク、画用紙、でんぷん糊、スポイド、透明シート、指絵具、ヘラ、筆、ローラー、洗濯糊、絵の具、霧吹き、給油ポンプ、たらい、透明容器、土粘土、すり鉢、自然物、糊、テラコッタ粘土、カラーセロファン、懐中電灯、段ボール、センサーボトル、白い布

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

4月：濡らした画用紙にインクを垂らし、にじみ、混色を楽しむ。また、手足に糊を塗り、自ら感触を楽しみ始める。5月ゆびえのぐを指で描く以外に、滑ったり、手足に描いたりして気持ちを開放して楽しむ。6月洗濯糊で溶いた絵の具で遊ぶ。糊や絵の具を調整しながら自分の加減で混ぜ合わせて変化を楽しむ。7月水、霧吹き、絵の具、給油ポンプなどの道具を自由に使える環境を整える。普段使うことのない道具を思うとおりに使ってみながら、いろいろと試行錯誤をして楽しむ。8月色がテーマの絵本を読み、いろいろな色があることを知り、赤・青・黄色・白の4色の絵の具を使って色を作る。9月土粘土を道具を使って、切り分けたり、ちぎったり、丸めたり、平たくのばしたり色々試しながら遊びを広げる。10月公園に出かけて自然物を集め、段ボールのフレームの中に、自然物を使って思い思いに表現して作品を作る。11月は持ち帰った自然物を、粘土にくっつけたり、ポンドを使用して造形物を作り、表現をする。12・1月暗い部屋の中でライトの光を使って、廃材やカラーセロファンを通して生まれる色や模様の影、ボール紙で作った形の影などに光を当ててみる。1月は公園で太陽の光を光源にして、太陽と影の関係に気付きながら遊ぶ。2月はプロジェクターで海中の景色を映し出し、制作物の影を投影して遊ぶ。3月水族館に遠足で出かけた経験をもとに、水族館で見た生物を作り、友達と一緒に水族館ごっこをする。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

・大胆に遊びたいこどもと丁寧に遊びたいこどもとで場を分けたことで、それぞれの遊び方を探求できている。無理強いせずに大丈夫と感じられることを重ねてきたことで活動が広がってきた。・指絵具でも苦手なこどもは様子を離れてみている様子があったが、「気持ちいい〜!」と言っているのを聞いて思わず触ってみる姿があった。服が汚れるとすぐに着替えるこどもや、手が汚れないように道具を使う姿もある。他のこどもの様子を見てやるやらないを決めている様子がある。やりたくない気持ちも認めながらそのこどももやりたいことが出来る環境を探っていった。その後のトロトロ絵の具の活動では、絵の具を溶いてつくる活動から参加することで興味が湧いて、安心感も得られたのか主体的に参加をする。比較的参加しやすい水を使った活動では、「どうしてだろうね?」と現象に対して問いかけをしながら探求をしている姿があった。土粘土では準備をしている間にも「早くやりたい」という声上がるようになり経験の広がりが見られた。光の取り組みでは、継続したことにより、2月は影を動かしながら物語を作ったり、光源と物との関係を考えながら工夫が見られ、経験のつながりを感じた。また、「今度はこうしてみよう」と繰り返し実験している姿もあった。3月は、遠足で水族館に言った経験を自由に素材を使いながら表現をした。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

・自信がない、または、失敗を恐れたり周りの評価を気にするこどもが多いクラスであった。汚れを気にするなどして体験が狭められることが無いように配慮したり、一人一人の感じ方は異なることを認め、自分で決めることも大切にしてきた。そうしながらも夏以降には心を開放して自由に表現したり、活動を楽しめる姿を期待しながら、「大丈夫」を積み重ねていったことで変化が見られた。夏には活動に入っていかなかったこどもが自分から「やってみたい」と言って参加できるようになった。気持ちを解放して楽しむ経験は、自分の感覚に向き合って自分自身を知る事にもつながったと感じている。後半は、経験を重ねていくことで「やってもいいんだ」から「やりたいことを自分で叶えるためにはどうしたら良いか」を考えて行動する姿に変わってきている。経験したことのあるなじみのある素材を用意することで「知っている安心感」が生まれていた。4歳児では「こうしたらこうなるはず」と変化を予測する姿が見られた。探求と共に、確かめる、確認をする姿があった。「こうしたい」という願いや自分の中に「問い」を持つことで、「自分の遊び」になっている。保育士が何を準備したらよいかをこどもに確認しながらすすめることも大切になった。同じテーマで公園・保育室と場所を変えてやってみたことで、多様な場を作る大切さや、外から持ち帰ったものがプラスのアイテムになり、想像が広がったと感じた。公園では、体を動かす活動だけでなく、自然物を拾ってその場で制作をしたことで、外遊びがより創造的に豊かになった。何かができるとか、上手という理由ではなく、自分の感覚で作り出したものをほめてもらう経験は、丸ごと自分をほめてもらったような気持ちになり、自己肯定感につながると感じた。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-0075
施設名	MIWAシンフォニア保育園
施設所在地	2-3-101アーバンドッグパークシティ豊
法人名	社会福祉法人みわの会

1. 活動のテーマ

<テーマ>

【色・自然】五感で感じた世界の探求と身体の発達

<テーマの設定理由>

・昨年度から、絵の具遊びなどを普段の遊びの中に取り入れており、今年度になっても絵の具やクレヨンといったものを用いた表現活動に子ども達は興味を持っていた。3歳以上のクラスに月に1回「美術」の時間に来ている美術講師と、クラスの子どもたちの興味をどのように広げていくか話し合いを持ち専門的な視点も取り入れて内容を計画した。

2. 活動スケジュール

・8月9月「一滴の水と出会う」たらいに入れた水に色素を垂らして水の変化を感じ探求心の芽生えを促す。・10月「感触と色」でんぷん糊に色を混ぜてフィンガーペインティングをする。感触と色が混ざる変化を指先や視覚などで感じる。11月「感触と出会う」白玉粉を用意し、粒から水を入れたり粉の状態にして変化を楽しむ。12月2月3月「土粘土」豊かなイメージをもって世界を広げる。1月軽量粘土と廃材を使って「親子」でイメージを形にするこ

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

・少人数で活動。担任が付き必要なものや、こどもの声を聴いて発見に寄り添う。・片栗粉、でんぷん糊、タレビン、食紅、混ぜる道具や器、プラ版、圧縮袋、ビニール袋、画用紙、土粘土、Kクレイ粘土、廃材

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

・9月一水を入れたタライに手を入れて、水の動きや変化を楽しむ。またタレビンで青い食紅を落とし、水に広がる様子を観察し、こうしたらどうなるかと探求を始める。色水をプラバンや画用紙に霧吹きで吹きつけるなどして水の特性を発見する。10月一液状から粘液状になる変化を楽しみ、フィンガーペインティングのように感触や表現を思い思いに楽しんだ。11月一片栗粉を粉の状態から少しずつ水を垂らして変化をしていく様子を楽しむ。1月一軽量粘土の感触を楽しみながら保護者の見守りの中で、見立てて想像力を発揮する。12・2・3月一土粘土の塊を触ったり、水を足しながら変化をする感触を味わったり、イメージを持ちながら形にして表現をする。自然物で造形をする

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

・五感を使ってモノの特性を感じたり、探求することに集中していた。また、感じた感触や気づきを「硬い」「べとべと」「さらさら」など言葉で表現している。2歳児でも、過去の経験に基づいて「こうなるのでは？」という予測をしてやってみる姿が後半に見られた。また、こども自身の経験がかかわり方に関係していた。保育者はこどもの発見に寄り添いながらこどもの世界を見守る必要はあるが、「こうすれば」と教えるのではなく、さりげなくやって見せる場面もあった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

・こども主体の活動では、保育者がこどもが発見している姿に気づき、保育者自身もじっくりとこどもの様子を見る余裕が生まれる。大人主導の活動では、保育者の持つイメージにとらわれてしまう。こどもは、自分で働きかけては確かめるという様子があり、過去の体験と結び付けて起きていることを納得しているようだった。また、自分の世界に入っているときは集中し、無言で自分の感覚を向き合っているようだった。後半になると友達のしていることを見まねしてみる姿も見られた。12月以降は、こども達の中で今までの経験が繋がり、イメージが豊かに広がってきている。経験したことの安心感が積み重なり、挑戦する気持ちが生まれている。自分から周りの世界に関わることを面白いと感じている。また、「柔らかくなった」「〇〇みたい」など感じたことや見たことを言葉で表せるようになっている。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-0075
施設名	MIWAシンフォニア保育園
施設所在地	2-3-101アーバンドッグパークシティ豊
法人名	社会福祉法人みわの会

1. 活動のテーマ

<テーマ>

【自然・光】「不思議に出会う」

<テーマの設定理由>

月に1回美術講師を招いて、美術活動を取り入れている。戸外活動や日々の保育の中で、自然物との発見や出会いを通して、年長だからこそ使える道具類を使ってみたいという姿がある。自然や道具と出会う経験を広げ、自然の理や仕組みを、探求しながら発見や気づきを持ち友達と共有する。

2. 活動スケジュール

美術講師による活動。月に1回、身近にある自然物や自然事象に触れて、様々な道具を使って自ら働きかけながら表現をする。活動内容：4月「塩」5月「公園の自然物」6月「土」7月8月「泡」9月「土」9月「スライム・泡」10月11月「土」12月「光と影」1月「音で遊ぶ」2月「布で遊ぶ」

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

少人数グループや個人で、集中して遊び込める環境設定をする。

塩、洗濯糊、インク、紙皿、筆、すり鉢、パネル、クレヨン、スポイド、土粘土、おろし金、ふるい、木槌、ジョウロ、石鹼、スポンジ、泡だて器、シェービングフォーム、粉絵具、ボンド、重曹、クエン酸、カラーセロファン、透明容器、懐中電灯、ダンボール、暗幕、廃材、ゴム、糸、筒、無のガムテープ、空き缶、布、紐、ライト、スズランテープ、リボン、洗濯ばさみ

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

4月：洗濯糊に溶いたインクに、塩を混ぜて変化を楽しみながら描く。5月：公園にて身近な自然物を、パネルに思い思いに貼り付けたり、すりつぶす、混ぜるなどして、イメージを楽しみながら表現をする。6月：土粘土の塊から土を掘りだし、削ったり、乾かしたり、水に溶かしてその様子を観察する。また、造形をする。7月8月：固形石鹼をすりおろしてカラフルな泡を作ったり変化を楽しむ。9月：スライムの材料などを混ぜる中で起こる様々な変化を楽しみ探求をする。10月：黒土、培養土などの粒や色の異なる土に対して感触や臭いを五感で感じ言葉で表現したり、混ぜ合わせたりする。また、板の上で友だちとイメージを共有しながらパノラマを作る。公園にも出て葉っぱやドングリなどの自然物も加えて表現をする。12月：ライトとカラーセロファンを使って光と影の不思議に気づき、探求しながら光の性質を知る。1月：事前に素朴な楽器の動画を見たり、触れたりした後、様々な素材を使って自分の音を探しながら楽器作りをした。2月：紙とは異なる特性の大きささまざまな柄の布を使って、自由に作ったり表現をする。3月：ピタゴラスイッチの装置を今までの経験を活かして作るこ

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

・自然物の変化に対して「こうしたらどう変わっていくのか」という探求心が見られた。「こうしたらどうなる?」と問いや仮説を作って、実際に確かめてみることで発見し、自分の知識となっていた。また友達同士でも「スポイドを使ってみたらいいよ。」などと自分の経験を友だちに教える姿もある。「グミは水に弱いんだ。ネバネバが無くならないから水になるんだよ。」「塩をかけてインクを垂らすとグミがくっつくんだよ。」と言葉で表現して周りに伝える。回数を重ね経験が広がると「こうしてみたい」という興味からの探求心も生まれて、やって確かめてみる技術も身につけている。使いたい道具がうまく使えないときやイメージができないときに、保育者が使い方などを提案するとさらに夢中になっていった。また正解を教えないことで、試行錯誤をして、その過程を楽しむ姿が見られた。後半は、保育士が遊びの継続を意識することで非日常的な環境を作ることができ、アイデアを実現する楽しさを実感していた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

・やりたいという思いの強さが、限りの無い探求心を生み、仮説を立てて確かめることを繰り返していた。「なんでだろう」と思うことが大切で、自分で発見したことは自分の知識になっている。たとえ、それがあまり役に立たない知識であっても失敗がないので「自分はすごい」と感じており、自己肯定感が育つ。また、回数を重ねることで友だちと繋がり、共感や一緒に工夫をする姿が生まれ、また、自信をもって友だちにアドバイスをする姿が生まれている。こども達のひらめきをONにするきっかけとなる豊富な素材を用意することで、想像力を発揮している。また、保育士は、正解を導くのではなく、アイデアを引き出す「問いかけ」や「言葉かけ」が大切である。こどもの発信したことをかなえるにはどう援助をしたら良いのかを考える。また、生活時間で区切って終わりにしがちな活動を、遊びを分断することなくこども達の願いをかなえながら継続する。そして、願いを受容されたことは、自分を信じる力につながると感じた。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-0075
施設名	MIWAシンフォニア保育園
施設所在地	2-3-101アーバンドッグパークシティ豊
法人名	社会福祉法人みわの会

1. 活動のテーマ

<テーマ>

【色・光】様々な素材と出会い、特性や自然の摂理を知っていく

<テーマの設定理由>

月に1回美術講師を招いて、美術活動を取り入れている。こどもによって経験の違いはあるが、粘土など可塑性の高い素材で遊ぶことが多い。また、散歩で自然物に興味を持ち、拾ったり集めたりして園に持ち帰り遊びに活かしている。「どうして?」「なに?」と不思議に思ったり、実際に自分で働きかけて変化を楽しむことに集中する姿があるので継続テーマとして設定した。

2. 活動スケジュール

・4月 絵の具と糊で遊ぶ ・5月 粘土で遊ぶ ・6月 カラーセロファンで遊ぶ ・7月 霧吹きで遊ぶ ・8月 手に描いて遊ぶ ・9月 土粘土で遊ぶ ・10月 トロトロ絵の具で遊ぶ ・11月 落ち葉で遊ぶ 12月 光と影で遊ぶ 1月 キラキラを作る 2月 お花紙で遊ぶ 3月 チョークで遊ぶ

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

・少人数で取り組めるように、また経験や興味、遊び方に個人差があるため、どの子もじっくりと取り組める環境を作った。・絵の具、でんぷん糊、画用紙、筆、カラーセロファン、セロテープ、障子紙、マスキングテープ、霧吹き、給油ポンプ、土粘土、乾燥土粘土、すり鉢、洗濯糊、落ち葉などの自然物、段ボール、懐中電灯、透明廃材、Kクレイ粘土、アルミホイル、CD、サインペン、お花紙、チョーク、黒画用紙、おろし器、鉢底用ネット、洗濯糊、空容器各種

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

・4月 赤・青・黄色の絵の具を画用紙に塗って色の変化や染みていく様子を楽しんだり、でんぷん糊を足して変化を楽しむ。・5月 手触りの良い伸びる粘土を使ってみる。・9月 土粘土は何からできているのかななどを伝え、大きな塊と小さく丸めたものを置くと、道具で働きかけたり水を付けて感触の変化を楽しむ。・10月 洗濯糊で溶いた絵の具を用意して、平面に垂らし動かして色の動きや色が混ざる様子を観察する。・11月 散歩で使った落ち葉を並べて観察をして葉っぱの中に色々な色があることに気づく。また、光の上に置いてみるなどして様々な角度から観察をする。・12月 セロファンに光を当てて影を映し、美しさを感じる。廃材とセロファンを使って造形したものに光を当て、光の特性や、光と影の関係を知る。1月 アルミホイルやCDなど、「キラキラした素材を使って造形する。作ったものに光を当てて反射する様子を観察する。2月お花紙で遊ぶ。水も用意し、色や形を変えることで遊びに発展する。3月 チョークを粉にする、砕く、水に溶かす、ビンに入れる、混ぜる等チョークの可塑性を活かし探求を深める。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

・集中して取り組む中で「一人でやるからどいて！」など友達とのトラブルも生まれたが、保育者はすぐに介入することなく子ども同士のやり取りを見守っていくことを心掛けた。・汚れることに抵抗のある子どもを予想して、遊び方によりグループを分けたことで個々の興味を継続して遊びこむことが出来ている。^また「ここをこうしたい」と保育者にやってもらいたい姿があり、前半は保育者が手伝うこともあった。また、新しい教材に対しては何をしたらよいかわからずに「もうやめる」という子どももいたが、友達の様子に気づかせて繋げたり、遊びのヒントを提案することで、やりたいことを見つける姿があった。可塑性のある素材の感触を苦手とするものがあるが、無理強いすることなくその姿も認めることで安心して自分を出せるようになることから少しずつ経験が広がっていく。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

・子ども達は出会った素材、道具に自ら色々関わりながら、そのものの特性や自然の摂理を体験して知っていく様子があった。・テープなどの教材をめぐって無駄に感じることもあったが、まずは自分の考える量を試してみることで、適量や使い方を学んでいる。また作ったものを見立てて子ども同士で遊ぶ姿も見られる。自分の感じたように働きかけ、選択することで、うまくいかなくても人のせいにすることなく、飽くなき挑戦をする姿があった。保育者の援助は求められたときに最小限にする。後半になると、子ども達個人の特性が顕著になり、まわりの目や評価、友達の様子を気にする姿と、積極的に自由な発想で遊びこむ子どもと二分化してきた。今後、どの子どもも自分の興味や関心にしがたって活動できる、安心した環境を整えていく必要を感じた。3歳児は「大丈夫」という気持ちをもとに経験を広げる大切さを感じた。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-0075
施設名	MIWAシンフォニア保育園
施設所在地	2-3-101アーバンドッグパークシティ豊
法人名	社会福祉法人みわの会

1. 活動のテーマ

<テーマ>

「色」～遊びの中でいろいろな色と出会い、五感を使って変化を感じたり、感じるままに表現をする～

<テーマの設定理由>

クレヨンを使って線などを描く活動から、色の名前を知ったり、色に関して興味を持ち始める。3歳児以上で美術講師による美術活動を実施しており、さらに1歳児クラスでも身の回りのものに、興味関心を広げる経験をさせたいと考えた。

2. 活動スケジュール

9月塊の水と出会う、10月色・感触と色、11月感触と出会う（白玉粉）、12・1月感触と出会う（土粘土）2月感触と出会う（軽量粘土）3月自然の色と出会う（花びら）

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

・こどもが保育室の中で過ごすうちに、素材に興味を持ちやすいように、目や手が届きやすい場所や位置に設定した。また、働きかけ方や興味の持ち方には個人差があるため、一人でじっくりと楽しめる環境を保障した。・食紅、タレビン、霧吹き、プラダンボール、透明ボール、スポイド、タライ、圧縮袋、ビニール袋、洗面器、白玉粉、水、土粘土、軽量粘土、生花

<活動の内容>

8月タライに入れた水に青い水を垂らし、色が広がっていく様子や板の上を流れていく様子を観察し「どうなっているんだろう」と探求をする。9月水を入れた圧縮袋の中にカラーセロファンやビーズを入れたものを、つついたり乗ったりして色や内容物の変化を観察する。ビニール袋に入れて渡すと手のひらでもんでみたり顔に当てて感触を楽しむ。10月着色したでんぷん糊の変化を楽しむ。指で描いてみたり、セロファンをくっつけてみたり、大胆に感触を楽しむなど好奇心を持って楽しむ。11月白玉粉を塊から粉、水を入れて変化を五感で感じながら手指を使って初めての感触を楽しむ。12・1月土粘土を小さく丸めたものと大きな塊を用意し、それぞれの興味の持ち方で土粘土で働きかける。2月手触りの良い軽量粘土を加工したり、見立てて遊ぶ。3月生花の花びらをつぶすなどして、色が出る様子を観察する。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

・はじめて触るもの見るものに出会ったときに、興味を持って抵抗なく手を伸ばすこどももいるが、戸惑う姿を見せるこどももいた。そのため、少人数以外にも、素材の出会い方を工夫していった。後半の軽量粘土では初めて参加するこどももいた。言葉で見立てる姿もあり、保育士が共感してイメージを広げることで遊びに集中をする。感触を楽しみ、特性を探求する中で「硬い」「くっついた」など素材の特性を言葉で表している。保育士が友達同士のやり取りを仲立ちすることで笑顔がうまれ抵抗なく楽しめるようになった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

・言葉を発することが少ない1歳児は、保育士が「この子は何に興味を持ち何か感じているのか」を見ることを意識することが大切であると感じた。また、知的好奇心を伸ばすためにも安心して、一步を踏み出せる環境作りと、保育士との関係づくりが大切である。後半は、手指の動きや働きかけ方が広がり、発達が促されたと感じた。親しみのあるおもちゃを用いることで安心感をもつこどももいた。日頃から親しんでいるもの（知っているもの）が心の支えとして、未知の世界に向かうときに必要な姿があった。イメージをして言葉で表現するようになってきたが、保育士が、こどものイメージが固定化しないよう気を付けて声をかけることも必要と感じた。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-0075
施設名	MIWAシンフォニア保育園
施設所在地	3-101アーバンドッグパークシテ
法人名	社会福祉法人みわの会

1. 活動のテーマ

<テーマ>

【光】「光と出会う」

<テーマの設定理由>

「光」を生活の中で気づき始めているこども達に、園に来てもらっている美術講師に関わってもらい、色々な光と出会う環境を作り、「あれ？」という気づきを持ち自ら働きかける行動につなげていく。

2. 活動スケジュール

1月26日27日「あれ？」「なんだろう？」とを感じる環境設定。光のトンネルや、光のボトル、モビールを用意して影と光を作り、明暗や色、動く様子に興味を持つ。2月ライトなどを持ち自分で光を動かしてみる。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

保育室の中に普段の探索あそびの延長上のように、設定をする。興味を持ち方や持続には個人差があるので、いつでも自ら働きかけられるように手の届くところに常設した。モビール、光のトンネル、カラーセロファン、ライト、センサリーボトル、スケッチブック、観察ケース

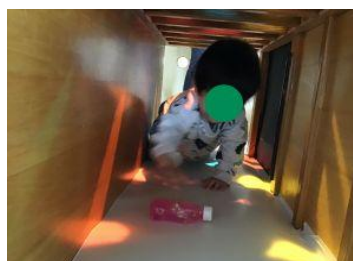
4. 探究活動の実践

<活動の内容>

・光のボトルに光を当てて動く色を目で追ったり、光のトンネルをくぐるなど五感や、体全体を使って光に出会う環境を整えた。こどもの反応を見ながら、保育室の中に普段から光の遊びに慣れ親しむ環境を作った。保育士が光を働きかけから、こどもが自分で光を動かす設定をする。また、いつでも楽しめるよう継続できる環境を整える。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

光のトンネルでは、光の観察をするよりも、自分の体を動かすこと（全身運動）が優位であった。また、光を操っているものよりも操っている保育士に興味を持つ姿があった。また、初めての経験や初めての人（美術講師）に対して緊張をする様子もあり、美術時間をきっかけに普段の保育室の環境の一つとして取り入れることで、光を普段遊びに取り入れて楽しめるようになってきた。発語は少ないが「あれ？」「これなあに？」という気持ちを、表情や指先の動きから感じ取れ、保育士が共鳴してこどもの気持ちを言葉で表現をした。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

・「楽しい」と言って楽しむ反応ではなく、その前段階の、見たことないものに出会う反応が見られた。保育士が想像していた反応と違っていたことで、大人とは違う見方や感じ方があることを改めて知り、その姿を見逃してはいけないと思った。こどもの実体験に寄り添うと同時に、少し先の発達を促す環境作りが大切と感じた。経験を重ねるうちに光や、光源（ライト）の存在に自ら気が付き、触ったり、手をかざして光や影の変化を楽しむようになる姿があったので、いつでも手を伸ばせる場所に設定をする必要性を感じ、常設した。